

## 鎮痛・鎮痙・収れん・消炎薬(ノックドウ剤を含む)

リスクの度合 の評価	A 薬理作用 B 抗血栓作用	C 重篤な副作用のおそれ D 服用のおそれ E 重篤な副作用のおそれ F 効能効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(慢性用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化
評価の基点	薬理作用 併用注意 併用禁忌(他の 薬との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	重篤な副作用のおそれ 基づくもの によるもの	重篤な副作用のおそれ 基づくもの によるもの	重篤な副作用のおそれ 基づくもの によるもの
テキサメタゾン	局所抗炎症 作用・皮膚血 管収縮作用 アキドロコ ルチソアセ トート・ブド ニソロジアセ トートと同等 の血管収縮 作用を示すこ とが認められ ている。	・重篤な副作用のおそれ 基づくもの によるもの	・重篤な副作用のおそれ 基づくもの によるもの	・重篤な副作用のおそれ 基づくもの によるもの
ステロイド抗炎症成分	・重篤な副作用のおそれ 基づくもの によるもの	・重篤な副作用のおそれ 基づくもの によるもの	・重篤な副作用のおそれ 基づくもの によるもの	・重篤な副作用のおそれ 基づくもの によるもの
トコトリチ	医療用はな し(経皮プロピ オング液は あり)			

鎮痛・鎮痙・收れん・消炎薬(パシブ剤を含む)

製品群No. 57

鎮痛・鎮痒・收れん・消炎薬(パシブ剤を含む)

## 鎮痛・鎮痙・収れん・消炎葉(ノバップ剤)を含む)

## 製品群 N.57

## ワークシートN.37

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ るべき副作用のおそれ	D 運用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) に該当するおそれ	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(解説用のおそれ)	H スイッチ化等に伴う使 用環境の変化
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	運用における注意	運用における注意	症状の悪化 (既往により歯膏の 再発・悪化をおそれ)	使用方法(解説用のおそれ)	効能効果
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	運用における注意	運用における注意	症状の悪化 (既往により歯膏の 再発・悪化をおそれ)	使用方法(解説用のおそれ)	スイッチ化等に伴う使 用環境の変化
評価の視点	アンドーム 抗炎症・抗 収縮作用	併用禁忌(他 薬との併用に より重篤な副 作用が発生す るおそれ)	重篤な副作用のおそれ	運用における注意	運用における注意	症状の悪化 (既往により歯膏の 再発・悪化をおそれ)	使用方法(解説用のおそれ)	スイッチ化等に伴う使 用環境の変化
評価の視点	アンドーム 抗炎症・クリー ム	アンドーム 抗炎症・抗 収縮作用	重篤な副作用のおそれ	併用禁忌(他 薬との併用に より重篤な副 作用が発生す るおそれ)	運用における注意	症状の悪化 (既往により歯膏の 再発・悪化をおそれ)	使用方法(解説用のおそれ)	スイッチ化等に伴う使 用環境の変化
評価の視点	クリルリチ ン酸	クリルリチ ン酸二カリ ウムの点眼 のみ	重篤な副作用のおそれ	運用における注意	運用における注意	症状の悪化 (既往により歯膏の 再発・悪化をおそれ)	使用方法(解説用のおそれ)	スイッチ化等に伴う使 用環境の変化

抗炎症成分

製品群No. 57

鎮痛・鎮痙・收れん・消炎薬(ハッブ剤を含む)

製品群No. 57 鎮痛・鎮痙・收れん・消炎薬(ノンコップ剤)を含む)									
リスクの程度 の評価		A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	D 滥用のおそれ	E 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 慢用方法(慢用のおそれ)	H スイッチ化等に伴う使用環境の変化等に伴う使用環境の変化
評価の観点		薬理作用	相互作用	併用禁忌(他の併用に伴う重篤な副作用が発生するおそれ)	併用注意	重篤な副作用のおそれ	薬理・毒性に基づく習慣性	適応禁忌	慢用投与(児童により誤飲の再発・悪化のおそれ)
クリルレチン	鎮痛	テルマクリン 軟膏	グリルレチン 抗炎症に対する作用 (伊蘭油抑制-ラット、肉芽腫抑制-ラット、抗炎症モルモット)を有する。筋萎縮作用は主成分であるグリルレチン誘導の化学構造がハイドロコーナゾーンの化学構造に類似していることによる可能性である。	併用禁忌(他の併用に伴う重篤な副作用が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	慢用投与(児童により誤飲の再発・悪化のおそれ)	慢用投与(児童により誤飲の再発・悪化のおそれ)	慢用投与(児童により誤飲の再発・悪化のおそれ)
ジフェンヒドミン	抗ヒスタミン成分	ジフェンヒドミン	アレルゲンを皮膚に接触したときに起こる癢、urticariaなどのアレルギー性皮膚反応は、本剤により著明に抑制される。	外用はなし	レスタジン	アレルゲンを皮膚に接触したときに起こる癢、urticariaなどのアレルギー性皮膚反応は、本剤により著明に抑制される。	頻度不明(過敏症)	*眼のまわりに使 用しない。	通常、症状により適量を1日数回、皮膚または粘膜に塗布または塗擦する。

鎮痛・鎮痙・吸収・消炎薬(パラブレーゼを含む)

## 製品群No. 57

## 鎮痛・鎮痙・収れん・消炎薬(ノパップ剤を含む)

ワーケシートNo.37		A 薬理作用		B 相互作用		C 重複的な副作用のおそれ		D 服用のおそれ		E 感覚背景(既往症、治療状況等)		F 物能効果(症状のおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)		H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	
評価の観点	評価内容	薬理作用	相互作用	併用禁忌(他の薬との併用時に重複的な問題が発生するおそれ)	併用注意	重複的な副作用のおそれ	重複的な副作用のおそれ	重複的な副作用のおそれ	重複的な副作用のおそれ	感覚背景	感覚背景	感覚背景	感覚背景	感覚背景	感覚背景	感覚背景	感覚背景
薬理成分	クロタミトロン オイラクス	本剤は抗ヒスタミン作用を示さない。しかし、また口の中の皮膚感覚のうち、その敏感度を抑制するが、他の皮膚感覚には影響を与えない。だから、抗ヒスタミン作用と局所麻酔作用は併用機序で作用機序とは異にすると考えられる。一般には、皮膚に感覚を手に入れ、温覚におこるこの刺激が雙眼かに一つ年齢を消失せざるといわれている。															

## 鎮痛・鎮痙・収れん・消炎薬(パップ剤を含む)

### 製品群No. 57

### ワークシートNo.37

リスクの度数	A 薬理作用	B 相互作用	C 重要な副作用のおそれ	D 適用のおそれ	E 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	F 適用方法(誤使用のそれ)	G 適用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ化等に伴う他の使用環境の変化
評価の視点	相互作用	薬理作用	重要な副作用のおそれ	重要な副作用のおそれ	薬理に基づく適応禁忌	重要な副作用の特徴(症状の悪化につながるおそれ)	重要な副作用の特徴(誤使用による誤用のそれ)	重要な副作用による誤用のそれ
イソプロピルメチルフェノール	フェノール代用	本剤は、使用適症においてグラム陽性菌、グラム陰性菌、結核菌には有効であるが、芽胞(梭状芽孢菌)、螺旋菌等及び大部 分のウイルスに対する効果は期待できない。	効用説明(他の併用により重大な副作用が発生するおそれ)	薬理・毒性に基づく副作用のおそれ	薬理・毒性に基づく副作用のおそれ	頻度不明(確実)	頻度不明(吸収され中等)	頻度不明(皮膚に触れると(皮炎を起すことがある)・眼に入らないよう注意する。本剤は必ず希釈して使用すること。坐までは易刺激性の部位には、温 度に合わせて使用する場合には、正常に使用するよりも低い温度とすることが望ましい。
日本成鋼	成鋼成分							・手指により障害の原因となる場合(皮膚・眼)に注意を要するおそれ)

## 製品群No. 57

## 鎮痛・鎮痙・收れん・消炎薬(ノベップ剤を含む)

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重複な副作用のおそれ すべき副作用のおそれ	D 薬用のお き薬の副作用のおそれ	E 感覚部位に及ぼす影響 (重複的な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化) につながるおそれ	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 化境域の 変化
安息香成分	ミホール水	本剤は使用して、辛葉酸(グラム陽性菌、大腸菌等)には有効であるが、細胞壁及び細胞膜のワイルスに対する抑制活性は弱い。イオン界面活性剤であるので、表面活性力を低下させ、清浄作用、乳化作用等を示す。作用機序は、電荷を帯びる細胞膜に作用する塩化ベンゼンカルコニウムが細胞表面に吸着・棲息され、脂質を形成させ、表面活性作用をあらわす。	薬理・毒性に特異体質アレルギー等によるもの	頻度不明(過敏症)	粘膜、創傷面または皮膚部に及ぼす影響(皮膚または粘膜に炎症があること)	原液は皮膚・粘膜に付着した場合は、頭部に炎症がある場合に即座に洗浄する(刺激性があるため)。②手指等は手術野や皮膚の表面に塗布しないこと。③医療用具の消毒:塩化ベンザルコニウム0.1%溶液で約5分間洗い、その後塩化ベンザルコニウム0.01%溶液(0.2%)を2%溶液を散布する。④医療用具の消毒:塩化ベンザルコニウム0.1%溶液(0.01~0.025%)を用いる。⑤医療用具の消毒:塩化ベンザルコニウム0.1%溶液に10分間浸漬するが、または塩化ベンザルコニウム水溶液で漂白液中で、その後塩化ベンザルコニウム水溶液で洗浄する。⑥手術室・検査室・器具・器物などの消毒:塩化ベンザルコニウム0.05~0.1%溶液を市販で塗布して漂拭するが、または噴霧する。⑦脚先の消毒:塩化ベンザルコニウム0.02~0.05%溶液を用いる。⑧粘膜の洗浄・消毒:塩化ベンザルコニウム0.01~0.05%溶液を用いる。	頭部に付着した場合は、頭部に炎症がある場合に即座に洗浄する(刺激性があるため)。②手指等は手術野や皮膚の表面に塗布しないこと。③医療用具の消毒:塩化ベンザルコニウム0.1%溶液で約5分間洗い、その後塩化ベンザルコニウム0.01%溶液(0.2%)を2%溶液を散布する。④医療用具の消毒:塩化ベンザルコニウム0.1%溶液(0.01~0.025%)を用いる。⑤医療用具の消毒:塩化ベンザルコニウム0.1%溶液に10分間浸漬するが、または塩化ベンザルコニウム水溶液で漂白液中で、その後塩化ベンザルコニウム水溶液で洗浄する。⑥手術室・検査室・器具・器物などの消毒:塩化ベンザルコニウム0.05~0.1%溶液を市販で塗布して漂拭するが、または噴霧する。⑦脚先の消毒:塩化ベンザルコニウム0.02~0.05%溶液を用いる。⑧粘膜の洗浄・消毒:塩化ベンザルコニウム0.01~0.05%溶液を用いる。	頭部に付着した場合は、頭部に炎症がある場合に即座に洗浄する(刺激性があるため)。②手指等は手術野や皮膚の表面に塗布しないこと。③医療用具の消毒:塩化ベンザルコニウム0.1%溶液で約5分間洗い、その後塩化ベンザルコニウム0.01%溶液(0.2%)を2%溶液を散布する。④医療用具の消毒:塩化ベンザルコニウム0.1%溶液(0.01~0.025%)を用いる。⑤医療用具の消毒:塩化ベンザルコニウム0.1%溶液に10分間浸漬するが、または塩化ベンザルコニウム水溶液で漂白液中で、その後塩化ベンザルコニウム水溶液で洗浄する。⑥手術室・検査室・器具・器物などの消毒:塩化ベンザルコニウム0.05~0.1%溶液を市販で塗布して漂拭するが、または噴霧する。⑦脚先の消毒:塩化ベンザルコニウム0.02~0.05%溶液を用いる。⑧粘膜の洗浄・消毒:塩化ベンザルコニウム0.01~0.05%溶液を用いる。
抗ヒスタミン成分	抗ヒスタミン	抗ヒスタミン作用及び抗アレルギー作用を有する。毛細血管拡張作用を有する。	抗ヒスタミン作用のおそれ	頭部に及ぼす影響(頭部に炎症があること)	頭部に付着した場合は、頭部に炎症がある場合に即座に洗浄する(刺激性があるため)。②手指等は手術野や皮膚の表面に塗布しないこと。③医療用具の消毒:塩化ベンザルコニウム0.1%溶液で約5分間洗い、その後塩化ベンザルコニウム0.01%溶液(0.2%)を2%溶液を散布する。④医療用具の消毒:塩化ベンザルコニウム0.1%溶液(0.01~0.025%)を用いる。⑤医療用具の消毒:塩化ベンザルコニウム0.1%溶液に10分間浸漬するが、または塩化ベンザルコニウム水溶液で漂白液中で、その後塩化ベンザルコニウム水溶液で洗浄する。⑥手術室・検査室・器具・器物などの消毒:塩化ベンザルコニウム0.05~0.1%溶液を市販で塗布して漂拭するが、または噴霧する。⑦脚先の消毒:塩化ベンザルコニウム0.02~0.05%溶液を用いる。⑧粘膜の洗浄・消毒:塩化ベンザルコニウム0.01~0.05%溶液を用いる。	頭部に付着した場合は、頭部に炎症がある場合に即座に洗浄する(刺激性があるため)。②手指等は手術野や皮膚の表面に塗布しないこと。③医療用具の消毒:塩化ベンザルコニウム0.1%溶液で約5分間洗い、その後塩化ベンザルコニウム0.01%溶液(0.2%)を2%溶液を散布する。④医療用具の消毒:塩化ベンザルコニウム0.1%溶液(0.01~0.025%)を用いる。⑤医療用具の消毒:塩化ベンザルコニウム0.1%溶液に10分間浸漬するが、または塩化ベンザルコニウム水溶液で漂白液中で、その後塩化ベンザルコニウム水溶液で洗浄する。⑥手術室・検査室・器具・器物などの消毒:塩化ベンザルコニウム0.05~0.1%溶液を市販で塗布して漂拭するが、または噴霧する。⑦脚先の消毒:塩化ベンザルコニウム0.02~0.05%溶液を用いる。⑧粘膜の洗浄・消毒:塩化ベンザルコニウム0.01~0.05%溶液を用いる。	頭部に付着した場合は、頭部に炎症がある場合に即座に洗浄する(刺激性があるため)。②手指等は手術野や皮膚の表面に塗布しないこと。③医療用具の消毒:塩化ベンザルコニウム0.1%溶液で約5分間洗い、その後塩化ベンザルコニウム0.01%溶液(0.2%)を2%溶液を散布する。④医療用具の消毒:塩化ベンザルコニウム0.1%溶液(0.01~0.025%)を用いる。⑤医療用具の消毒:塩化ベンザルコニウム0.1%溶液に10分間浸漬するが、または塩化ベンザルコニウム水溶液で漂白液中で、その後塩化ベンザルコニウム水溶液で洗浄する。⑥手術室・検査室・器具・器物などの消毒:塩化ベンザルコニウム0.05~0.1%溶液を市販で塗布して漂拭するが、または噴霧する。⑦脚先の消毒:塩化ベンザルコニウム0.02~0.05%溶液を用いる。⑧粘膜の洗浄・消毒:塩化ベンザルコニウム0.01~0.05%溶液を用いる。	
抗ヒスタミン成分	抗ヒスタミン	外用はなしシフェンヒドラミンはありレステミコーグ散膏	頭部に及ぼす影響(頭部に炎症があること)	頭部に付着した場合は、頭部に炎症がある場合に即座に洗浄する(刺激性があるため)。②手指等は手術野や皮膚の表面に塗布しないこと。③医療用具の消毒:塩化ベンザルコニウム0.1%溶液で約5分間洗い、その後塩化ベンザルコニウム0.01%溶液(0.2%)を2%溶液を散布する。④医療用具の消毒:塩化ベンザルコニウム0.1%溶液(0.01~0.025%)を用いる。⑤医療用具の消毒:塩化ベンザルコニウム0.1%溶液に10分間浸漬するが、または塩化ベンザルコニウム水溶液で漂白液中で、その後塩化ベンザルコニウム水溶液で洗浄する。⑥手術室・検査室・器具・器物などの消毒:塩化ベンザルコニウム0.05~0.1%溶液を市販で塗布して漂拭するが、または噴霧する。⑦脚先の消毒:塩化ベンザルコニウム0.02~0.05%溶液を用いる。⑧粘膜の洗浄・消毒:塩化ベンザルコニウム0.01~0.05%溶液を用いる。	頭部に付着した場合は、頭部に炎症がある場合に即座に洗浄する(刺激性があるため)。②手指等は手術野や皮膚の表面に塗布しないこと。③医療用具の消毒:塩化ベンザルコニウム0.1%溶液で約5分間洗い、その後塩化ベンザルコニウム0.01%溶液(0.2%)を2%溶液を散布する。④医療用具の消毒:塩化ベンザルコニウム0.1%溶液(0.01~0.025%)を用いる。⑤医療用具の消毒:塩化ベンザルコニウム0.1%溶液に10分間浸漬するが、または塩化ベンザルコニウム水溶液で漂白液中で、その後塩化ベンザルコニウム水溶液で洗浄する。⑥手術室・検査室・器具・器物などの消毒:塩化ベンザルコニウム0.05~0.1%溶液を市販で塗布して漂拭するが、または噴霧する。⑦脚先の消毒:塩化ベンザルコニウム0.02~0.05%溶液を用いる。⑧粘膜の洗浄・消毒:塩化ベンザルコニウム0.01~0.05%溶液を用いる。	頭部に付着した場合は、頭部に炎症がある場合に即座に洗浄する(刺激性があるため)。②手指等は手術野や皮膚の表面に塗布しないこと。③医療用具の消毒:塩化ベンザルコニウム0.1%溶液で約5分間洗い、その後塩化ベンザルコニウム0.01%溶液(0.2%)を2%溶液を散布する。④医療用具の消毒:塩化ベンザルコニウム0.1%溶液(0.01~0.025%)を用いる。⑤医療用具の消毒:塩化ベンザルコニウム0.1%溶液に10分間浸漬するが、または塩化ベンザルコニウム水溶液で漂白液中で、その後塩化ベンザルコニウム水溶液で洗浄する。⑥手術室・検査室・器具・器物などの消毒:塩化ベンザルコニウム0.05~0.1%溶液を市販で塗布して漂拭するが、または噴霧する。⑦脚先の消毒:塩化ベンザルコニウム0.02~0.05%溶液を用いる。⑧粘膜の洗浄・消毒:塩化ベンザルコニウム0.01~0.05%溶液を用いる。		

鎮鎮痛・鎮痙・收れん・消炎葉(ハッブ剤を含む)

リスクの程度 評価	A 素理作用 B 徒手作用	C 直属な副作用のおそれ		D 著用のお それ C' 單施ではないが、注意 すべき副作用のおそれ		E 効果・効果・症状の悪化 につながるおそれ		F 効果・効果・症状の悪化 につながるおそれ		G 著用方法（誤用のおそれ）	
		併用禁忌（他の 薬との併用に より重大な問 題が発生する おそれ）	併用注意	直属な副作用のおそれ	直属な副作用のおそれ	薬理・毒性に 特異体质・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 特異体质・ア レルギー等 によるもの	用量投与量	用量投与量	用量投与量の 変化	用量投与量の 変化
評価の根拠	素理作用	アレルギー等による問題	併用注意	直属な副作用のおそれ	直属な副作用のおそれ	薬理・毒性に 特異体质・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 特異体质・ア レルギー等 によるもの	用量投与量	用量投与量	用量投与量の 変化	用量投与量の 変化
ジフェンヒドロラミン	素理作用	アレルギー等による問題	併用注意	直属な副作用のおそれ	直属な副作用のおそれ	薬理・毒性に 特異体质・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 特異体质・ア レルギー等 によるもの	用量投与量	用量投与量	用量投与量の 変化	用量投与量の 変化
ドーピング・クロロルフェニラミン	素理作用	アレルギー等による問題	併用注意	直属な副作用のおそれ	直属な副作用のおそれ	薬理・毒性に 特異体质・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 特異体质・ア レルギー等 によるもの	用量投与量	用量投与量	用量投与量の 変化	用量投与量の 変化

## 製品群No. 57

## 鎮痛・鎮痙・収れん・消炎薬(ハップ剤を含む)

ワーカーシートNo.37		C' 重篤な副作用のおそれ るべき副作用のおそれ		D 服用のお それ		E 患者背景(既往症、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能効果(症状の悪化) につながるおそれ		G 使用方法(使用用のおそれ)		H スイッチ 化等に伴う使 用環境の変 化		
評価の根拠	評価の根拠	A 薬理作用	B 組立作用	C 重篤な副作用のおそれ るべき副作用のおそれ	D 服用のお それ	E 患者背景(既往症、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能効果(症状の悪化) につながるおそれ	G 使用方法(使用用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う使 用環境の変 化	I 使用方法(使用用のおそれ)	J 使用方法(使用用のおそれ)	K 使用方法(使用用のおそれ)	L 使用方法(使用用のおそれ)	
評価点	評価点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ べき副作用のおそれ	重篤ではないが、注意す べき副作用のおそれ	薬理・毒性に 特異性に基づくもの	薬理・毒性に 特異性に基づくもの	重篤ではないが、注意す べき副作用のおそれ	通常に伴う使 用環境の変 化	通常に伴う使 用環境の変 化	通常に伴う使 用環境の変 化	通常に伴う使 用環境の変 化	通常に伴う使 用環境の変 化	
クロタミン オイラックス	本剤は抗ヒス タミン作用を示さないこ と、またヒトの皮 膚感覚のうち の皮膚感覚を抑 制するが、他の には形態学的 に似たものとな どから、抗ヒ スタミン作用、 局所降伏作用、 は作用機序を を真ににするこ 考えられる。一 般には、皮 膚に熱感、や く熱感とし て温覚に対する この刺激を が警戒的に そつ率感を消 失させている。  アミニ安息香 酸エチル吸 湿「マルイ シ」	併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	重篤な副作用のおそれ べき副作用のおそれ	C' 重篤な副作用のおそれ べき副作用のおそれ	重篤ではないが、注意す べき副作用のおそれ	重篤ではないが、注意す べき副作用のおそれ	重篤ではないが、注意す べき副作用のおそれ	通常に伴う使 用環境の変 化	通常に伴う使 用環境の変 化	通常に伴う使 用環境の変 化	通常に伴う使 用環境の変 化	通常に伴う使 用環境の変 化	
鎮痙成分	局所制汗成分	アミニ安息香 酸エチル吸 湿「マルイ シ」												



鎮痛・鎮痙・消炎薬(ハッピ剤を含む)

製品群No.57

## ワークシートNo.37

## 鎮痛・鎮痙・収れん・消炎薬(ハッピング)を含む)

## 製品群No.57

リスクの程度 の評価	A 球理作用 B 相互作用	C 重要な副作用のおそれ すべき副作用のおそれ	D 避用のおそれ	E 治療状況(既往歴) (既発は副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(體使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う使 用環境の変 化
評価の視点	球理作用 相互作用	重要な副作用のおそれ べき副作用のおそれ	重要な副作用のおそれ べき副作用のおそれ	巨嚢管腫瘍(既往歴) (既発は副作用につながるおそれ)	慎重投与 注意(投与の際 に生じるおそれ)	適応禁忌 注意(投与の際 に生じるおそれ)	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化
抗炎症成分 収縮成分 殺菌成分	サリチル酸 メチルミヤ ザワ」	イソプロピル メチルフェ ノール	サリチル酸 メチルミヤ ザワ」	抗炎症性に 特異体質ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 特異体質ア レルギー等 によるもの	大量使用:頭 痛、嘔吐、食欲不 振、癪脈	大量使用:頭 痛、嘔吐、食欲不 振、癪脈

'スク'の程度 の評価		A 薬理作用 B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 薬用のおそれ D' 重篤な副作用のおそれ	E 悪性骨質・既往歴、治療状況等 E' 重篤な副作用につながらるおそれ	F 物能・効果(佳状)の悪化 F' につながらるおそれ	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 等に伴う 使用環境の変化 H' に伴う 使用環境の変化
評価の観点		薬理作用	相互作用	併用禁忌(他 薬の併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	薬理作用のおそれ 薬理・毒性に特異体質ア レルギー等によるもの	薬理・毒性に基づく 薬理作用のおそれ 薬理・毒性に特異体質ア レルギー等によるもの	薬理・毒性に基づく 薬理作用のおそれ 薬理・毒性に特異体質ア レルギー等によるもの	功能性
塗膜クロルヘ キシン	抗菌作用 (in vitro試験) 広範囲の微 生物に作用 し、グラム陽 性菌には低 濃度で、グラ ム陰性菌には 比較的高 濃度で、有 効菌作作用を 示す。・グラ ム陽性菌に は、細胞壁 に膜がみられ る。・芽胞形成 菌には、グラ ム陽性菌に 比べて細胞 壁が弱い。 ・結核菌に して水溶液で 静置作用を 示し、アル コール溶液で は迅速な抑 菌作用を示 す。	併用禁忌(他 薬の併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	薬理・毒性に特 異体質ア レルギー等 によるもの	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ 重篤な副作用のおそれ	薬理・毒性に基づく 薬理作用のおそれ 薬理・毒性に特 異体質ア レルギー等 によるもの	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ 重篤な副作用のおそれ	薬理・毒性に基づく 薬理作用のおそれ 薬理・毒性に特 異体質ア レルギー等 によるもの	功能性
塗膜成分								

鎮痛・鎮痙・收れん・消炎薬(パッフ剤を含む)

卷之三

## みずむしたむし用薬

製品群No. 58

ワークシートNo.38

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重複な副作用のおそれ すべき副作用のおそれ	D 遊用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重複な副作用につながらるおそれ)	F 効能・効果(症状のおそれ) につながらるおそれ	G 使用方法(飼育用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	
評価の視点	薬理作用	相互作用	薬理作用(他の 併用薬品(他 剤との併用に より重複へなる 事が発生する 場合))	薬理作用(併用注意)	薬理・毒性に 基づくもの	薬理に基づく 適忾禁忌	薬理・毒性に 基づくもの	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化	
抗白蟻 菌成分	エキサラミ <sup>®</sup> 医療用医薬 品としてなし	ペキロング リーム	抗真菌作用 ・疥癬アモロ リフ・ヘン・皮 膚糸状菌 (Trichophyto n)。	抗真菌作用 ・疥癬アモロ リフ・ヘン・皮 膚糸状菌 (Trichophyto n)。 Microsporum 属、 Endemophytic on属、酵母 類(Candida 属、黒色真 菌(Fonsecaea compactum 等及び黒 菌(Massasse turfuri)に強 い抗真菌作 用を有した。作 用機序アモロ リフ・ヘンの作 用機序は、エル ゴステロール 合成経路上 の2つの段 階を選択的 により、細胞 膜を障害し抗 真菌活性が 発現される。	0.1~5%未 満 (局所の刺繡 炎、接触皮 膚炎、癧、紅 斑) 0.1%未満 (癧、癧 瘡)	妊娠又は妊娠 能力のある婦人 の既往歴	本剤部分過敏症 の既往歴	1日1回患部に塗布する。 下記の皮膚真 菌症の治療 ・白斑(足白 蟻、手白蟻、体 部白蟻、股部 白蟻) ・皮膚カジダ 症(指節白蟻 ・脚節白蟻) ・間接接觸 ・兒童生菌性紅 斑を含む)、爪 癩	投与部位として角 膜用には使 用しない。

## みずむし・たむし用薬

### ワーチシートNo.38

### 製品群No. 58

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 薬理作用のおそれ すべき副作用のおそれ	D 運用のおそれ (医療背景(既往歴、治療状況等) (薬理学的副作用につながるおそれ)	E 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う使 用環境の変 化	I 効能効果 変化
					薬理に基づく通常禁忌	薬理に基づく通常禁忌	薬理に基づく通常禁忌	薬理に基づく通常禁忌	I 効能効果 変化
評価の視点	薬理作用	相互通用	重篤な副作用のおそれ	薬理で特がんが き副作用のおそれ	薬理に基づく通常禁忌 (脱毛等によるもの)	薬理に基づく通常禁忌 (脱毛等によるもの)	薬理に基づく通常禁忌 (脱毛等によるもの)	薬理に基づく通常禁忌 (脱毛等によるもの)	下記の皮膚 真の治療 薬、体節白錠、 脱毛白錠 ・皮膚カンジダ ・皮膚びらん ・癰風
五 白 ソール 塗 薬 成 分	抗真菌作用 ・塗 ・外溶液 ・アトラント 軟膏% 外溶液%	塗 ・外溶液% 外溶液% 外溶液%	抗真菌作用 ・塗 ・外溶液% 外溶液% 外溶液%	抗真菌作用 ・塗 ・外溶液% 外溶液% 外溶液%	アトラント 膏 0.1%未満 (局所の刺激、 感、皮膚炎、 発赤・紅斑、 そつ痒感、是 れを加味) 0.1%未満 (龟裂、白錠 移)	アトラント 膏 0.1%未満 (局所の刺激、 感、皮膚炎、 発赤・紅斑、 そつ痒感等) (亜剤) (*軟膏と 比類して刺 激が多い。)	アトラント 膏 0.1%未満 (局所の刺激、 感、皮膚炎、 発赤・紅斑、 そつ痒感等) (亜剤) (*軟膏と 比類して刺 激が多い。)	アトラント 膏 0.1%未満 (局所の刺激、 感、皮膚炎、 発赤・紅斑、 そつ痒感等) (亜剤) (*軟膏と 比類して刺 激が多い。)	1日1回患部に塗布する。

## みずむしたむし用薬

製品群No. 58

ワーケシートNo.38

「リスク」の程度 の評価	A 薬理作用 B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ すべき副作用のおそれ		D 通用のお こやちに伴う 重篤な副作用につながるおそれ	E 患者尊重取扱い、治療状況等 につながるおそれ	F 効能・効果(症状の悪化) につながるおそれ	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化		
		評価の観点	薬理作用	相互作用	併用禁忌(他の 薬との併用に より重篤な副 作用が発生す る場合)					
白 毒 素 成 分	メントール クリーム 液、 スプレー	抗真菌作用 ・抗真菌活性 塩酸プロナ ン系抗 菌、 Microsporum Epidermophy ton属)及び 黒 菌 (Malassezia furfur)に対 して強い抗 菌力を示し、そ の作用は發 育的である。 作用機序は 塩酸プロナ ン系抗 菌の作用 機序は、真菌 細胞膜の構 成成分である エリゴコテ ロールの合 成阻害である が、その作用 部位はイミダ ゾール系抗 菌と異なりス クワレンのエ ボキシ化反応 によっている。	薬理・毒性に 特異体質ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 特異体質ア レルギー等 によるもの	0.1~5%未 満 (馬糞の先 端、赤紅斑、そ う痒、接触皮 炎、水痘) 0.1%未満 (黒蝶、痒 感、急速 の炎症) 安全性評価 対象例9,517 例中、131例 (1.35%)206 件の主な副作用: 局所の発赤、 紅斑54件 (0.57%)、接 触皮膚炎39 件(0.41%)、 搔痒9件 (0.41%)、刺 激感22件 (0.23%)等 液剤 安全性評価 対象例13,212 例中、168例 (0.83%)23 件の主な副作用: 局所の赤、 紅斑7件 (0.38%)、そ う痒件 (0.31%)、刺 激感4件 (0.21%)等	妊娠投与 や乳母投与の 再発・悪化のお かげ	症状の悪化 につながるお それ に注意を要 するおそれ	通用対象の 選定がおこな れるおそれ に注意を要 するおそれ	長期服用に よる體能被 害のおそれ	下記の皮膚真 菌症の治癒率 ・白疕・足部白 疕・股関節白 疕・腰痛・足 部白疕 ・黒蝶
タオニン クリーム 液	タオニンは Candida屬、 Trichophyton 屬、 Microsporum 屬等におかれて 強い抗菌作用を 示す。			本邦の成分過敏 症(馬糞生産、難 易性皮膚炎) によるもの	液クリーム 1日1回患部に塗布する。 スプレー 1日1回患部に噴霧する。	使用方法(誤使用のおそれ)	用法用量	下記の皮膚真 菌症の治癒率 ・白疕・足部白 疕・股関節白 疕・腰痛・足 部白疕 ・黒蝶		

## みずむし・たむし用薬

製品群No. 58

ワークシートNo.38

リスクの程度 評価の評価	A 薬理作用 B 相互作用	C 臨床的な副作用のおそれ るべき副作用のおそれ	D 運用のおそれ べき副作用のおそれ	E 患者背景、既往歴、治療状況等 (適応な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 等に伴う使 用環境の変 化	
評価の視点 元白蝶菌成分	薬理作用 相互作用	薬理作用 併用注意 併用する他の 薬との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	薬理作用のよそれ 薬理・毒性に 特異体質・ア レルギー等 によるもの によるもの	薬理に基づく 運営禁忌 留意すべき 副作用のよそ れ	症状の悪化 (挙手により腰痛 の再発・悪化のおそ れ) に生じる部位を する部位を保 るおそれ)	運営禁忌 留意すべき 副作用のよそ れ)	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化	
シクロピロク ン・スオラミン	ホルモン作用 ・シクロロコ ン・オラジン ・オラジン ・ハラフェ ン液	併用する他の 薬との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	シクロロコ ン・オラジン は皮膚炎状 態及び母 類に伝 播作用を示 し、その作用 は絶対的 である。 多くのグラ ム陽性菌 の細胞壁に 抗酸作用を 示す。 作用機序 真菌細胞の 膜及び酵素 に作用して 細胞の破壊 ・細胞の繁殖 ・細胞の増殖 に必要な物 質の供給を阻 害し真菌を死 亡のと考えら れている。MI Cレベルで は、外敵菌 (黒酵母、各 種糞便菌等)の 細胞内への 取り込み及び 細胞内高分 子物質(ダ ク、DNA、 RNA)の合成 を阻害し、細 胞の発育を阻 止する。高濃 度(殺菌濃 度)では、更 に膜透過性 阻害を示し、 K+、ア ニオンの離 出を亢進さ せる。	0.1-5%未 だ (皮膚炎、皮 膚刺激作用) ハラフェ ン液 ((* クリーム と同様の 副作用報 告))	本剤の成分過量 ・可能性のある婦人 ・出生体重児又 は新生兒 ・乳児等生理性紅 斑(アルコール等 の局所刺激作用) (トラフエン液) (電気・感電面(ハ ラフェン液))	・妊娠又は妊娠 の可能性のある婦人 ・出生体重児又 は新生兒 ・乳児等生理性紅 斑(アルコール等 の局所刺激作用) (トラフエン液) (電気・感電面(ハ ラフェン液))	使用部位 眼科用として角 膜、結膜には使 用しない。 ・電気・感電面に は使用しない。 ・感電・感電面に は注意して使用 する。	1日2~3回眼部に塗布又 は塗擦する。